月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 28 年目
創刊 1989 年　Nr. 321
2016年3月号

Gerhart Frankl, Blick vom Belvedere auf Wien (Landschaft I), 1948　© Belvedere, Wien　Öl und Tempera auf Leinwand 61 x 84 cm　部分　12 頁参照
ベルヴェデーレ上宮 Oberes Belvedere「Meisterwerke im Fokus　Gerhart Frankl - Rastlos」展より　2016 年 4 月 3 日まで開催

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 54

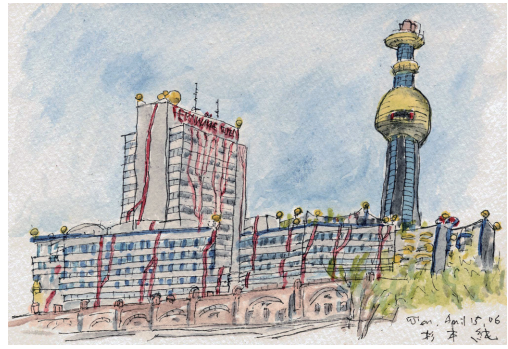
中国のハルビン工程大学の招待により、ハルビンや北京で開催された国際会議において講演したことがある。その縁で、一昨年から二年続けて同大学で開催される雪像コンクールとシンポジウムに本学の学生が招待された。今年も招待されたので、応募があった中性子工学研究室修士二年の山内二輝君と井上福太郎君、修士一年の小西健人君、四回生の大内健太郎君の四名からなるチームを派遣した。一月四日～六日に開催された雪像コンクールには地元中国から四五、タイ五、ロシア四など十ヶ国から六四チームが参加した。我が国からは京大と北大、高知工大の三チームが参加した。七日に開催されたシンポジウムにはハルビン工程大、京大、韓国科学技術院が各四名参加し、それぞれ、三、四、三テーマの発表と討論が行われた。外国チームには現地大学のボランタリーが二名付いて何かと世話をしてくれる。

シンポジウムの様子

完成したビリケン像

雪像コンクールでは、三×三×三・五メートルの雪ブロックを丸三日間かけて削って像を作る。マイナス二十度以下の寒さと二年前の唯一の経験者井上君が二日目でダウンするという厳しい状況下、ビリケンの雪像を必死で作り上げた。また、シンポジウムでは全員が研究発表して存在感を示し、討論にも積極的に参加した。宿泊した国際寮やシンポジウムでも他大学の学生との交流機会を多く持つことができた。ハルビンは井上君以外は初めてで、珍しい料理やボランタリーの案内で市内観光も楽しむなど、新しい友人を得るとともに、貴重な体験ができた。予想以上に多くの人たちと関わることとなり、本当に行ってよかった、と学内報告会では笑顔で語っていた。本年は、吉川榮和京大名誉教授が主宰されるシンビオ社会研究会のご好意により旅費を負担して頂いた。紙上を借りてお礼申し上げます。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の建築家を紹介する。ウィーン生まれのフンデルトヴァッサー（一九二八～二〇〇〇年）は、幼い頃森で花を摘み、押し花にするのが好きだったが、花をきれいなまま残したいと絵を描き始めた。戦後は画家を志し北アフリカへ旅に出た。自然と共に暮す生き方に共感し、それを絵に表現したが、都市に戻ると建設ラッシュが始まっていた。新しい建物はみな角ばっていて、灰色で無機質。そうした建築に違和感を覚え、自然への回帰を唱え、曲線を多用した独自の建築を始めた。三区のフンデルトヴァッサー・ハウスとシュピッテラウの焼却場が有名である。日本では大阪市環境局舞洲工場などを建設した。



一方、京都市下京区に生まれた白井晟一（せいいち：一九〇五～八三年）は、十二歳で父と死別。画家に嫁いだ姉の所に身を寄せ、青山学院中等部に入学。その後京都市に移転し、京都高等工芸学校図案科（現京都工芸繊維大学造形科学科）に入学した。京大の哲学者、戸坂潤に兄事。やがてベルリン大学哲学科に入学、ヤスパースらに師事。その後パリでアンドレ・マルローと出会う。三三年に帰国し建築設計を手がける。戦中は秋田に疎開して建築を続け、戦後はモダニズム建築大盛の風潮に背を向け、哲学的と称される独自の建築を生み出した。佐世保市の懐青館が代表作。両者とも当時の大勢に迎合せず、独自の建築を確立したことが共通している。

余談であるが、筆者はかつてフンデルトヴァッサー・ハウスの近くに住み焼却場も良く目にしたが、白井晟一はつい最近知った。両市生まれの建築家を紹介できた幸運に感謝しつつ、焼却場を描いたスケッチを掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■